

日和とはじまりの朝ごはん

千咲ゆず葉 Yuzuha Chisaki



アルファポリス文庫

プロローグ

夜明けと共に、店内の明かりが灯る「はじまり食堂」。

店主の日和が一人で営むこのお店は、朝ごはん専門の食堂だ。

木材の温もりに包まれた店内には、今日もほっと安らぐような香りが広がっている。訪れた人の心まであたためてくれて、悩める人にもう一度はじまりをくれる、そんな不思議なお店。

ただし、このお店には変わった注意書きが一つ。

『ここは面倒ごとが多いお店。面倒なことが苦手な方はご注意ください』

この注意書きの本当の意味を、まだ誰も知らない。

今日も、はじまり食堂には新しいお客様がやってくる。

第一章 忘れられた記憶の謎なぞ

なんだかいつもよりよく眠れた……。

そう思ってた目覚めた朝だったが、体を起こすと重い感覚。最近寝ても疲れが取りきれていない気がする。

私——中島早紀なかしまさきは重い体をぐっと伸ばした後、リビングに向かった。そこですぐにある異変に気づいた。家の中がやけに静かなのだ。

普段ならおばあちゃんがテレビを見ていて、その音量がうるさいくらい聞こえるのに。

「……おばあちゃん？」

呼びかけながらリビングに顔を出した。おばあちゃんは、私より起きるのが早いから、この時間はリビングのくたびれたソファに座っているはず。

だけどその姿は見えない。

心臓がどくと音を立てる。同時に嫌な予感が背筋を駆け抜けた。

「どこにいるの!? おばあちゃん!」

慌てて家の中を捜し回った。洗面所、トイレ、キッチン。どこを捜しても見当たらない。それどころか物音一つしないのだ。

家の中を一通り捜してから、息を整える暇ひまもなく玄関げんかんに向かった。真っ先に目に入ったのは、ぼっかりと空いた靴のスペース。

「まさか、また!？」

おばあちゃんがいつも履はいている、グレーのスリッポンがない。嫌な予感があたたて、外に出てしまったみたいだ。

血の気が引くってこういうときのことを言うんだと思った。

冷や汗が背中を伝って、焦りのせいでうまく頭が回らない。

ただ散歩に出ただけなら、こんなに慌てたりしない。

だけど、おばあちゃんは病気を抱えている。それが私を焦らせる理由だった。



おばあちゃんに異変を感じはじめたのは、何気ない日常の中でだった。最初は冷蔵庫の中に財布をしまったり、その日の朝に食べたものを思い出せなかったり。

気になる症状はあったけど、年を取れば物忘れくらいあるものだと思っていた。それから医師に「認知症です」と言われたのは数カ月前。

認知症は、脳の細胞が少しずつ壊れていって、記憶や判断力が失われていく病気だという。

私は正直、あまりピンときていなかった。

今思えば信じたくなかったのかもしれない。

だけど、診断されてからはあつという間で、私のことを忘れてしまう日がやってきた。

「あなた……どちらさん？」

なんて、真顔で言われたときは、あまりの衝撃に動けなくなった。

改めて認知症という病気の怖さを知った。

大切に残したい記憶がどんどん抜け落ちて、今まで送ってきた日常がゆっくりと崩れていくみたいだった。

おばあちゃんは、私にとってたった一人の家族だ。

私が子どもの頃に両親が事故で亡くなって、それからおばあちゃんとずっと二人で暮らしてきた。

たとえおばあちゃんが私のことを忘れても、私が覚えていればそれでいい。

名前を呼ばれなくなつて、一緒にごはんを食べて笑い合えたらそれでいい。

忘れられても、思い出してもらえなくても……。

大切なおばあちゃんが、ここにいてくれればそれだけでいい。そう思っていたのに――。

ずんと目の前が暗くなって、心が沈んでいく。

「ああ、どうしよう。車道に飛び出したりしないかな。横断歩道も赤信号で渡ってしまいかも……ああ、もう！」

横断歩道は、赤信号で止まること。青信号になってから渡ること。そんな誰もが当たり前にできることが、おばあちゃんの中ではわからなくなってしまうときがある。

それが認知症という病気の怖さだ。

心配なことが山ほど込み上げてきて、心がかきむしられるようだった。

どうか、無事でいて。それだけを願いながら、スマホと財布を握りしめて、私は家を飛び出した。



早朝の六時過ぎ。

まだ眠っているような町を私は駆けていく。

「おばあちゃん！ おばあちゃん！」

一刻も早くおばあちゃんを見つけないと私は、呼びかけながら辺りを探す。

早朝の住宅街は、まだ人が少ない。朝刊を配る自転車に乗った人がすれ違いざまに、怪訝けげんそうな目をこちらに向けてくる。

それもそのはず。私は慌てて家を飛び出してきたので、部屋着のままだった。足元は裸足はだしにサンダルで、髪かみだつてろくに整えていない。

我ながらひどい格好だと思う。けれど、人目を気にしている場合じゃない。一秒でも早く、おばあちゃんを見つけることが大事だ。

焦る気持ちをなんとか抑えながら、私はおばあちゃんが行きそうな場所を、頭の中で順番に思い浮かべた。けれど、おばあちゃんがどこに行こうとしたのか、まったく見当がつかない。

この辺で早朝に開いているお店は、ほとんどないと思う。だとすると、二十四時間営業している近所のコンビニ？

でも財布を持っているのかもわからない。

胸の鼓動きどうがどんどん速くなっていく。

「もう、なんでもないの……」

いくら捜しても見つからなくて焦りが募る。

普通なら、今頃一緒に朝ごはんを食べていたはず。

ああ、そうだ。このままだと仕事には行けそうもない。

職場に休みの連絡をしないと……。

私は市役所の観光課に勤めて今年で三年目。スマホを確認すると、まだ六時過ぎ

たばかりだった。

当然、市役所は開いていない。この時間に電話をかけても誰も出ないだろう。そう判断した私は、連絡先の一覧を開いた。

表示された名前の中から、ある人の番号をタップした。

「大木さん……起きてるかな」

私が電話をかけた相手は、観光課の先輩である大木さんだ。いつも気にかけてくれる先輩で、介護認定の手続きや、利用できる制度のことなど、おばあちゃんのことでも度々相談に乗ってもらっている。

こんな朝早くに申し訳ないと思いますが、今は頼れる人に連絡したかった。数回のコール音のあと、聞き慣れた声が電話口から聞こえてきた。

「もしもし。中島さん？」

「朝早くにすみません……！ 中島です。実は、今日お休みをいただきたくて」

「えっ、どうしたの？ 体調悪い？」

「いえ……おばあちゃんが、いなくなっちゃってしまっ」

一瞬、電話の向こうが静かになる。

「いなくなっちゃった!? 中島さんのおばあさまってたしか……認知症よね。それは徘徊^{はいかい}ってこと？」

大木さんは、市役所の福祉課で働いていたこともあり、高齢者支援の制度や認知症について詳しくかった。

「徘徊^{はいかい}」という言葉を覚えてくれたのも大木さんだ。徘徊とは、認知症の人が突然いなくなってしまう症状のこと。何も知識がなかった私に、そう教えてくれた。

「はい……徘徊^{はいかい}だと思います。今搜^{さが}しているところで」

「それは大変じゃない! そうね。中島さんはたしか二人暮らしだったよね。他に頼れる人はいる? 大丈夫なの?」

心配そうな声に、きゅっと胸の奥が痛くなる。

「ごめんなさい。ご迷惑をおかけして……」

休むことへの罪悪感から謝罪すると、電話の向こうから呆れたような声が返ってきた。

「謝ることじゃないでしょ。お休みのことは気にしないでいいから。中島さんは真面目で、一人で抱え込みすぎるところがあるから……私でなければ相談してね。まずは

おばあさまを捜すことだけに集中しなさい」

「……ありがとうございます」

通話が切れると、ふうと息をはいた。大木さんと話せて張り詰めていた気持ちが、少しだけ落ち着いた。だけど、おばあちゃんが見つかったわけじゃない。

今日はおばあちゃんのデイサービスの日だから、そこにも連絡をしないといけない。でも、職員さんたちも出勤前の時間だろう。それなら、まずはおばあちゃんを捜そう。「これからずっとこうなのかな……」

次々とやらなければいけないことが浮かんで、頭がパンクしそうになる。

私はおばあちゃんと、今まで通り仲良く暮らせたらそれでよかった。

仕事に疲れて帰ってきたら、おばあちゃんが作った茶色の色味が多くて、味が濃^こいめのごはんを食べる。

そんなふうに、ただ普通に生活したいだけ。ただそれだけなのに、今はそれが難しい。仕事とおばあちゃんの介護の両立。自分なりに頑張っている方だと思っていた。現実から逃げたいと思ったときだって、数えきれなくらい何度もあった。どちらも目を逸らさずに向き合った。だけど、私の心には疲れが蓄^{ちくせき}積されていく。

『早起、朝ごはん食べようか』

『おばあちゃん、何言ってるの？ さっき食べたばかりでしょ？』

しつかり食べたはずなのに、ごはんを食べたことを忘れてしまったんだ。全く同じことを三十分前にも聞かれたのに。

『赤い布を搜^{さが}してるんだけど、知らないかい？』

『さっきも言ったけど、うちにそんな物ないの！』

脈^{みく}絡もない質問は、その意図が理解できない。一日に何度も繰り返されたら、どうしたってイライラしてしまう。

同じ会話のキャッチボールを何度もするのは、正直疲れる。まるでゴールの見えない道をひたすらに走っているような感覚だった。

——もう、なんで私ばかりこんな目に遭^あうの。

頭の中がその言葉だけで埋め尽くされて、足がこれ以上動かない。

いや、とつくに私の心は限界を迎えていたのかもしれない。
 “認知症”だと診断された日から、ずっと心をすり減らしてきたし。だけど、苦しくても助けてって誰にも言えなくて……。

……こんなことなら、いつそのこと——。

一瞬、言っただけはいけない言葉が脳裏をかすめた。その考えを振り払うように、頭を左右に大きく振る。

すぐに振り払ったはずなのに、胸の奥にざらりとしたものがこびりついて離れない。こんなことを考えてしまう自分にも、さらに嫌気がさした。

だめだ。今はとにかく、おばあちゃんを見つけないと。

思い直して、足を踏み出そうとした、そのときだった。一歩進んだつま先が、道路のひび割れに引っかかる。

「あ——」

気づいたときには、体が前へ傾いていた。とつさに踏ん張ろうとしたが、間に合わない。次の瞬間、膝と手のひらをアスファルトに打ちつけた。

「いっ……！」

鈍い痛みが走る。しばらくその場から動けず、私は呆然と地面を見つめた。

「もう、全部しんどい……」

膝を擦りむいた痛みが引き金になって、視界や思考が閉ざされていく。
 飛び出した心の声は、静かな早朝の町に消えていった。



カランッ。

遠くの方で、軽やかなベルの音が聞こえた気がした。

顔を上げると、通りにあるお店の前に人の影が見える。それは見覚えのある小さくなった背中だった。

「……お、おばあちゃん？」

慌てて立ち上がると、その影も動き出す。

「ま、待って！」

私の声は届いていないのか、その影は立ち止まることなく、目の前にあるお店の扉

を開けて、その中に入っていく。

あの猫背気味の丸くなった背中中は、きつとおばあちゃんだ。私は息継ぎする間もなく追いかけた。

お店の前につくと、食欲を誘う香りが、ふわりと流れてきた。

お店の外観を確認すると、建物の下半分は味のあるレンガ調の造りで、落ち着いた佇まいのお店だった。

入り口の目の前に看板があり、はじまり食堂と書かれている。

ここはなんのお店なのだろう。飲食店ではあるんだろうけど。

木の扉には、手書きの「OPEN」の札がぶら下がっていた。時刻は六時過ぎ。こんなに早い時間から開いているのは珍しいと思う。

扉の前で足を止めて、深呼吸をする。しばらく息を整えてから、意を決して右手で取っ手を握った。

ゆっくり扉を開けると、カラン、と扉についたベルの音が鳴り響く。

店内に一步足を踏み入れた瞬間、中からふわりと立ちのぼってきたのは、ほっとするようなあたたかい出汁の香り。

それから、冷たい空気が頬を撫でた。走り回って上がった体温が、一気にほぐれていくようだった。

「おはようございます」

奥の方からやわらかな声が聞こえる。

店内の間接照明に照らされていて、カウンターの向こうに立つ女性が、にこりと微笑んでいた。

「……おはようございます」

気づけば口が自然に動いて挨拶を返していた。

店員さんだろうか。プラウンのエプロンをつけた女性は、優しい笑みを浮かべている。やっぱり飲食店みたいだけど、こんなに早く開いているなんて。ふと頭の隅でそんなことを思っていると……。

奥の方で、椅子がきしむような音がした。

視線を向けると、カウンター席に見慣れた後ろ姿があった。

柔らかな髪質の白い髪に、見覚えのある部屋着を着ている小さい背中。

「おばあちゃん！ 捜したよ！」

息が詰まるような思いで、声をかけながら駆け寄った。見つかってよかった。ようやくほっと息をつける。

「あら、探してくれてたの？」

ゆっくり話す柔らかい声。私が昔から知ってるおばあちゃんの声だ。

目の奥がじんと熱くなる。安堵とかいような感情があるけど、こうしてまた会話ができることがどうしようもなく嬉しくて、涙がこぼれそうだった。なのに――。

「それで……どちらさんだったか」

……また、私の存在を忘れている。

その言葉を聞いた瞬間、呼吸するのを忘れそうになった。思考が止まって、頭の中が真っ白になる。

そんな私の気持ちなんて気づかない様子で、おばあちゃんとはばかんとした表情のまま、のんびりと笑った。

「あらあら。そんなに息を切らして、どうしたんだい？」

その瞬間、頭の奥で何かがぷつんと切れた。家からいなくなったおばあちゃんを捜して、必死に走り回っていたのだ。こんなに心配したのに。私の苦労なんて一つもわ

かっている。それどころか、私のことさえ忘れているなんて……。

「もう……こんなに捜したって言うのに、普通忘れるとかある？」

思わず声が大きくなった。知らず知らず握りしめていた拳に力がこもる。

「ええ？」

「朝起きたら家にいなくて、ずっと捜してたんだよ……」

なんとか絞り出した声はうわずって震えてしまう。今まで我慢していた感情が、堰を切ったようにあふれ出した。

涙が込み上げてくるのを必死でこらえながら、かろうじて言葉をつないでいく。

「捜した？ わたしのことをかい？」

「私、おばあちゃんに何かあったんじゃないかって……、本当に心配で……っ。私の気も知らないで、へらっと笑ってさ」

噛み合わない会話に、胸がぎゅっと痛くなる。

その間も、おばあちゃんとはばかんと口を開けたまま。意味がわからないといった様子で首をかしげている。

私がいくら言ったところで、おばあちゃんには伝わらない。

そもそも、私のことを忘れてるんだから。もう、私の知っている大好きなおばあちゃんはいないんだ――。

胸の奥に、真っ黒に染まったインクみたいな感情がじわじわと広がっていく。

「あの……一息つきませんか？」

「え？」

私の怒りを切るように、柔らかな声が飛んできた。顔を上げると、カウンターにいた女性がカップを持っていた。

その声があまりにも優しく、込み上げてきていた感情の波がぴたりと止まる。

「悦よろこさんのこと、走って捜されてたんですね……喉のども渴かわいたでしょう」

「……え、えっと」

言葉がうまく出てこない。怒りで熱くなっていた頭に、急に冷たい水をかけられたみたいだった。

それに、悦さんとはおばあちゃんの名前だ。

いつの間に名前を聞いたのだろう。

「これよかったらどうぞ」

カウンター越しに差し出されたティーカップから、ほのかに甘い香りが立ちのぼる。突然のことに戸惑いながらもゆっくり受け取った。

「……いただきます」

ぐくりと喉が鳴って、ようやく喉が渴かわいていたことに気づいた。喉の渴かわきに気づかないくらい、おばあちゃんを捜すのに夢中になっていたらしい。

ゆっくり口に運ぶと、一口飲んだだけで、渴かわきが潤うるっていく。

独特な香りが鼻に抜け、やさしい甘さの次にほどよい苦みが広がった。

「あ、美味おいしい……」

自然と口からこぼれた感想。胸の奥に残っていた怒りが、波のように引いていくのを感じた。

「ブレンドしたハーブティーです」

彼女はそう言って、また優しい笑みを浮かべた。

「えっと、なんだかとても落ち着きました」

「それはよかった。ハーブティーにはリラックス効果があるんですよ」

「そうなんですか……」

張り詰めていた気持ちが緩んでいくような優しい声だった。

「あれ？ 膝を擦りむいてませんか？」

そう言われて自分の膝を見ると、擦りむいた傷口からは、うつすら血が滲んでいた。

「ああ、さっき転んじゃって」

血が出てたなんて気づかなかった。膝の痛みなんて霞むくらい、心の方が痛かったから、正直それどころじゃなかった。

「大変！ 今救急箱持ってきますね」

言い終えると同時に、店の奥へ駆けていく。数秒後には、救急箱を抱えて戻ってきた。

「こちらへどうぞ」

促されるまま近くの椅子に腰を下ろした。途轍もなく申し訳ない気持ちが込み上げてくる。

「すみません。朝からおばあちゃんが突然お邪魔して、私までお騒がせしてしまって」

「気にしないでください」

彼女はそう言うと、慣れた手つきで消毒液を取り出した。

「沁みますよ」

「……いつ」

コットンで押さえながら、傷口へ消毒液を当てる。次の瞬間、ひりりとした痛みが走った。それから慣れた手つきで、絆創膏まで貼ってくれた。

「あ、赤いネイル素敵ですね」

彼女の視線が、足元に落ちる。慌てて家を飛び出してきたせいで、今日は裸足にサングルのままだった。足の爪には、剥げかけた赤いネイル。見られたことが急に恥ずかしくなって、思わず足を引つ込めそうになる。

「あ……ありがとうございます」

「綺麗な赤色ですね。赤が好きなんですか？」

「そうですね。赤は昔から好きかな。公務員なので、派手な手のネイルは禁止なんです……だから足だけでも、って思ってた」

そう言いながら足元を見下ろす。改めて見るとやっぱり雑だった。

自分で塗ったものだから、ところどころ剥げてきてるし、よく見れば色むらもある。前はネイルサロンに通っていたこともあった。手のネイルを奇抜にできない分、フットネイルで、足元がカラフルになると気分が上がってたっけ。

「自分で塗ってるから、へたつびなんですよ。お店でやってもらいたいんですけど。おばあちゃんがいるので、なかなか時間も取れなくて」

おばあちゃんが認知症になってからは足が遠のいて、ずいぶんとネイルサロンには行っていない。

美容院もネイルも、後回しにする生活が当たり前になっていた。

「休みの日は、おばあちゃんがデイサービスに行ってる間に買い物したり、掃除したり。気づいたら一日終わってて」

紹介してもらったデイサービスなども利用しているし、相談に乗ってくれる福祉課の担当の方もいる。私一人で抱え込んでいるわけじゃない。

それでも、限られた時間の中では、どうしても自分のことは後回しになってしまう。「家事や買い物すると、あつという間に時間がなくなってしまうよね」

「そうなんですよ！」

今日会ったばかりなのに、不思議と話しやすい人だと思った。その優しい相槌に、肩の力が抜けていく。

「あの……おばあちゃんが突然来たみたいで、ご迷惑かけてすみません。私、おばあ

ちゃんを捜してここに来て……そうだ。さっき、悦さんって呼んでましたけど、どうしておばあちゃんの名前がわかったんですか？」

「悦さんはここにきてすぐに、自己紹介してくれたんです」

そういえば、おばあちゃんは、昔から挨拶には厳しかった。「初めて会う人には、ちゃんとご挨拶をしなさい。自分から名前を名乗るのが礼儀よ」と、口うるさいくらい言っていた。

きつと今日も、いつもの癖で自分から「悦です」と名乗ったのだろう。

「そうだったんだ。……ここって、ごはん屋さんで合ってますか？」

「はい。ごはん屋さんで合ってますよ。朝ごはん専門店なんです。私はここの店主で日和と言います」

お店の人に名前を名乗られるなんて、予想していなかった。戸惑いながらも、つられて口が開く。

「……えっと、私の名前は、中島早紀です」

「早紀さん、悦さんのこと捜してたのですよね……大変でしたね」

「すぐく、疲れました」

「ここで再会することができてよかったです」

「よかった……って言っているのかな？　なんかもうよくわからないです」

日和さんの優しい声に、張り詰めていた気持ちがほだされて、つい本音がこぼれた。
「何かありましたか？」

そう聞かれて、すぐに返事をするのができなかった。

認知症のおばあちゃんを、一人で外へ出してしまった。事情を話したら、きっと呆れられる。

そんな考えが頭をよぎり、私は口を閉ざした。

頭を上げられないでいると、日和さんは事情を追及することもなく、しばらく待ったあと、ふと思いついたように口を開く。

「そうだ。朝ごはん食べませんか？」

予想もなかった言葉に、私はぼかんとした。

「……え？　朝ごはん？」

反射的に顔を上げた。唐突に言われた言葉を、すぐには頭が理解できない。

「お腹が空いていたら、頭も回らないです。悦さんを捜して動いたから、お腹空い

てないですか？」

そう言われてお腹に手を当てると、ぐう、とお腹が小さく鳴った。

今になってようやく自分が空腹なことに気づいた。

「お腹は……すっごく空いてます。朝ごはん食べてなくて」

「早紀さんにおすすめのメニューは、この、あなたのための朝ごはんです」

そう言って日和さんは、壁に掛けられた黒板を指さした。

手書きの朝ごはんの文字が並ぶ中、一番下には大きな文字で「あなたのための朝ごはん」と書かれている。

料理名も値段も書いていない不思議なメニューだった。思わずその文字を、じっと見つめる。

「えっと、そのメニューは何が出てくるんですか？」

「お客様によって異なります」

「違う？」

「はい。注文してくださったお客様のためだけの朝ごはんなので」

「私はなんだろう……」

考えてみても、何が出てくるのかまったく想像できなかった。

「では、早紀さんの朝ごはん探しをはじめましょう」

「朝ごはん探し？」

「調理に取りかかる前に、早紀さんのお話を聞かせてください。そうですね、悦さんのお話を聞いてもいいですか？」

そう聞かれて、私は視線を横へ向けた。

窓際の席では、おばあちゃんのがんびりとお茶を飲んでいる。さつきまで私が必死に捜していたのが嘘みたいに、普段通りのおばあちゃんの横顔だった。

「おばあちゃんは、認知症なんです。突然いなくなるのも疲れるし、さつきみたいに私のことを忘れちゃったことが……しんどくて」

気づけば本音を吐き出していた。

会ったばかりの人に、話しすぎたかな。そう後悔していると、日和さんはうんうんと相槌を打っている。

「ごめんなさい……病氣の話とかしちゃって……重いですよね」

「いえ、話してくれてありがとうございます」

そう言つて優しく微笑むので、肩の荷が軽くなるようだった。
「あの、もう少し話してもいいですか？　こういうこと話せる人ってあまりいないて……」

「もちろん！ 私でよければ」

こんなふうに初対面で、深いところまで話せる人ってなかなかいない。

それだけ日和さんの醸し出す雰囲気、優しいのだと思う。

心があたたかくなって、口を開きかけたときだった。

「ちょっといいかい？　赤い……布を知らないかい？」

会話を遮断するほどの大きい声に、体がびくりと反応する。

さつきまで静かにお茶を飲んでいたおばあちゃんは、立ち上がって辺りを見渡していた。

「おばあちゃん、ここは家じゃないよ。それに赤い布なんてなかったよ」

この質問をされるのは何回目だろう。

何度も何度も繰り返される会話。こういうのが、もう疲れる。

誰にもぶつけられなかった苛立ちが、またじわじわと広がっていく。

「恥ずかしいからやめてよ、おばあちゃん」

「でもね、あの赤い布がないと、困っちゃうのよ」

「知らないんだってば。何度も同じこと言わせないで……！」

「あれがないと困るから、捜してくれないかい？」

言葉が一方通行で会話が成立しない。

日和さんと話して、穏やかになった心に、土足で踏み込まれたような感覚になった。

「赤い布なんて家にもなかったじゃん……」

——赤い布はどこにある？

この質問は、何度もされたことがある。

もちろん最初は、家中を捜した。だけどいくら捜しても見つからなかった。

認知症は過去と現在の記憶が、ごちゃまぜになるらしい。きつとおばあちゃんもそうなんだと思う。

ただ意味もなく質問しているのだろう。

苛立ちが募って、椅子が大きな音を立てるほど勢いよく立ち上がる。

「もう他の人の前でやめてよ！ いい加減にしてほしい。何度も意味のない質問しな

いで！」

思わず怒鳴ってしまった。

我に返ると、私の顔を覗き込むおばあちゃんは、眉を八の字に下げていた。

そんな表情をさせたかったわけじゃない。

だけど私の心だって、悲鳴をあげている。

もうやめて。私だってどうすればいいか、わからないんだ。

言葉の歯止めが利かなくなった自分が嫌になって、思わず目を伏せた。

「……そういうことか」

日和さんは、ひらめいたような顔をして、小さく頷いた。

「えっと？ 日和さん？」

「あなたのための朝ごはん、見つけた！ 今から早紀さんのための朝ごはんを作ります」

日和さんは流し台へ向かうと、水道の蛇口をひねって、手を洗いはじめた。

「『見つけた』ってどういう意味ですか？」

「ふふっ、楽しみにしてください」

満足そうに頷きながら言った。

日和さんの穏やかな声を聞くと、不思議と怒りが薄れていく感じがした。さつきまで怒っていたはずなのに。どうやら日和さんのペースに巻き込まれているようだ。

肩の力が抜けた私は、すんと椅子に座り直した。

それからお店の中を見渡すと、端の方にあつた黒板が目に残る。

「なにになに? 『ここは面倒ごとが多いお店。面倒なことが苦手な方はご注意ください』?」

その言葉の意図がわからず、無意識に首をかしげた。

……面倒ごとが多いお店?

どういう意味なんだろう。

不穏な言葉を見た途端、一気に不信感が押し寄せる。

「あの……あれってどういう意味ですか?」

人差し指で黒板を指すと、日和さんの視線がそれを辿る。

「そのまんまの意味ですよ」

日和さんは視線を落として、一拍置いてから答えた。

「そのまんまの意味って?」

「じきにわかると思います」

食いがつてみたけど、結局さつきの質問をはぐらかされてしまった。

聞いたところで答えてくれそうにないし、これ以上考えても仕方がない。深く考えるをやめて、目の前の日和さんを眺めた。

ここはカウンターキッチンだから、距離が近い。手元の動きがよく見える。

ボウルを引き寄せ、手際よく卵を一つ、二つと割り入れていく。

箸でゆつくりと円を描くように混ぜはじめた。

見ていると、使う材料は……卵だけ?

「甘いだし巻き卵と、しょっぱいだし巻き卵。どっちが好きですか?」

ふいに投げかけられた質問に、私は一瞬瞬きをした。

「しょっぱい派……かな」

気づけば迷いもなく、するりとそう答えた。

「やつぱりしょっぱい派か。美味しいですよ。塩っ気のあるだし巻き卵」

「そうですね……おばあちゃんが作る料理って、基本的に味が濃いので、だし巻き卵も、濃いめだったかも」

「早紀さんのご家庭の味は、しょっぱいだし巻き卵なんだ」

そう言われてみれば、自然とおばあちゃんの味を答えていたことに、私はようやく気がついた。

学生の頃からお弁当には、いつもだし巻き卵が入っていた。

出汁の香り、少し焦げ目もある色合い。塩気もちよつと強かった。だけど毎日食べても、不思議と飽きることはなかった。

むしろ、入っていない日があると、ちよつとだけ寂しかったくらいだ。

思い出そうとしなくても、私の体に自然と残っていた味。

おばあちゃんが、ずつと作ってくれていたからだ。

思えばずつと、あの味に育てられてきたのだと思う。

黙ったまま、隣にいるおばあちゃんの顔を横目で見つめた。湯呑みを両手で包み込み、のんびりとお茶をすすっている。

隣にいるはずなのに、まるで他人みたいに遠い。

こんなに近くにいるのに、私の記憶にいるおばあちゃんは、もうどこにもいない気持ちになってしまふ。そのことがどうしようもなく辛かった。

「もうしばらくお待ちくださいね」

日和さんはそう言うのと、箸をもう一度ボウルに落とした。

調味料と塩を一つまみ加えて、手際よく卵を混ぜていく。フライパンに油を敷いてから、溶いた卵液をゆっくりと流し入れた。

ジュッ、と音がして、なんだか懐かしさを感じた。

日和さんは慣れた手つきで、菜箸さいばしを使って卵をくるりと巻いていく。薄く焼かれた卵が、箸の先で折れたたまれ、厚みを増していた。

料理を仕事にしている人は、さすがだな。そう思わせる手つきだった。

私もだし巻き卵を作ったことはある。でも、菜箸だけじゃうまく返せなくて、結局フライ返しに頼ってしまった。

私は視線を逸らさず、じつと見ていた。

不思議と心が落ち着いていくような気がした。そう感じた瞬間、ふいにおばあちゃんの後ろ姿が脳裏によみがえった。



懐かしい記憶が、映画のワンシーンみたいにな、ゆっくりと頭の中で流れ出した。私が小学生だった頃。朝のキッチンには、決まっておばあちゃんの姿があった。花柄のエプロンをつけて、キッチンに立つ、今よりもずっと背筋の伸びたおばあちゃん。

私はおばあちゃんが料理をする姿を、眺めるのが好きだった。

「早紀、お弁当作ったから忘れないようにね」

「おばあちゃん、ありがとう。だし巻き卵は入ってる？」

「ああ、早紀が好きだから、ちゃんと入れたよ」

「ふふっ、おばあちゃんの作るだし巻き卵は美味しいからね」

私が満足げに笑うと、おばあちゃんは嬉しそうに目尻を下げて笑った。

そういえば、おばあちゃんも、菜箸だけでくるりと卵を巻いていた。

卵は破れることなく、何層にも重なり、あつという間に、綺麗なだし巻き卵の形に

なっていた。

次々に美味しいものが出来あがっていくのが、子どもながらに、なんだか不思議に思えて。

——おばあちゃんの手は、まるで魔法みたいだな。

そんなことを思いながら、おばあちゃんの隣で、飽きることなく眺めていた。



思い出に浸っていると……鼻にやってきた出汁の香りに、意識が現実へと引き戻される。

「どうぞ、召し上がってください」

日和さんは焼き上がったばかりのだし巻き卵を、カウンター越しに丁寧に差し出した。

「だし巻き卵……どうしてこれが私のための朝ごはんなんですか？」

「その答え合わせは、お腹が満たされてからにしましょう」

またはぐらかされた。だけどそんなことより、目の前のだし巻き卵を見ると、あまりに美味しそうで意識を奪われてしまう。

白いお皿の上に、だし巻き卵が六つ。

ふつくらとした卵に、ほんのり焼き色がついている。立ちのぼる湯気が、ゆらゆらと空気の中に溶けていくみたいだった。

顔を近づけると、出汁の匂いがやってきて、思わずごくりと喉が鳴った。

「あったかいうちに食べてくださいね」

私はこくりと頷いて、両手を合わせる。

「……いただきます」

端っこにある一つを箸でつまむと、ふわりと揺れた。箸から伝わる感触だけで、やわらかさが伝わってくる。

さつそく口に運ぶと、じゅわつと出汁の味が広がって、ぴたりと手が止まった。

もう一度、味を確かめるように噛んでごくりと飲み込む。

あれ……私、この味知ってる。

ふと思い出したように、味に懐かしさを感じた。

塩気が強くて、しょっぱいだし巻き卵。

でもどこかほっとする味。

噛みしめると同時に、頭に浮かんだのはおばあちゃんが作ってくれたお弁当だった。

私が高校を卒業するまでずっと作ってくれたお弁当。

そうだ。おばあちゃんが作る、だし巻き卵の味に似てるんだ。

「あの、このだし巻き卵って、お店の味ですか？」

「いえ、実はある人に、レシピを教えてもらって作ったんです」

「それって……！」

——おばあちゃんですか？

そう聞こうとして思いとどまる。だって、おばあちゃんが覚えていないはずないと思っただから。

おばあちゃんに視線を送ると、ぼーっと一点を見つめている。こうした様子は家でもよく見る姿だった。

ほらね。認知症なんだから、覚えてるわけないよ。

「おばあちゃんの味かと思ったんですけど、そんなはず不是吗ね。認知症で全部

忘れてるんだから」

自分に言い聞かせるように言った言葉が、どんどん小さくなっていく。

「以前に聞いた話なのでですけど、人間の味覚って不思議なんですよ？」

唐突に話が変わって、思わず「え？」と短く息が漏れる。顔を上げると、カウンター越しの日和さんと目が合った。

「舌が覚えていることって、脳内よりもずっと長く残るんですって」

「……へえ」

「美味しかったとか、そのとき誰と食べたとか……そのときの気持ちまで、味覚と共に思い出したりすることもあるそうなのです」

たしかに、このだし巻き卵を食べた途端、私の中で記憶が手繰り寄せられたようにやってきた。

「でも、おばあちゃんは……私のこと、忘れてるんです」

ぼつりとこぼれ落ちたその言葉は、自分で思っていたよりも深く底に落ちた。事実なのに、改めて口にする心が痛い。

「悦さんが、このだし巻き卵の味を、教えてくれたんですよ」

「おばあちゃんか？ そんな、まさか」

「ここに来てすぐのことです。『お弁当には、しょっぱいだし巻き卵を入れるんだ』って教えてくれたんです」

日和さんは隣に座るおばあちゃんへ視線を向けて、また続ける。

「悦さんが『孫の早紀は甘いので、しょっぱいだし巻き卵が好きだからねえ』って、それだけじゃなくて、隠し味も教えてくれました」

「隠し味？」

「悦さんのだし巻き卵は、隠し味に自家製のマヨネーズを入れるそうです」

「自家製？」

「ええ。酸味がまるやかだから、出汁の風味を邪魔しないし、冷めてもふわふわになるって、嬉しそうに教えてくれました」

「えっ、マヨネーズって自分で作れるんですか？」

おばあちゃんが自家製のマヨネーズを作っていたことも、マヨネーズが家で作れることも、私は何も知らなかった。

「マヨネーズは、卵黄と酢、それから油があれば作れますよ。油を加えて混ぜ続ける

ので、だいぶ手間はかかりますけどね。実は私が使っているのも、自家製のマヨネーズなんです」

そう言っ、日和さんが差し出した丸みのある小皿には、マヨネーズが盛られていた。見慣れている市販のマヨネーズよりも、少し黄色味が強い気がする。

「よかったら、そのまま味見してみてください」

「えっ、そのままですか？」

「このスプーンでどうぞ」

渡された小ぶりのスプーンを持って、おそろおそろすくい口に運ぶ。

「……あれ？」

卵の濃厚なコクが口いっぱいに広がる。知っているマヨネーズなのに、まるで別物だった。

市販のマヨネーズより酸味がやわらかく、卵の風味が強い気がする。

「知ってるマヨネーズと違う」

「卵黄をたっぷり使っているので、卵の風味がしっかり感じられるんです。酸味も控えめに作っているの、出汁の風味を邪魔しません」

「へえ。手作りマヨネーズか……ひと手間があると、こんなに違うんだ」

「だし巻き卵に入れても、卵の美味しさをそのまま引き立ててくれるんですよ」

私はだし巻き卵を箸でつまんだまま、しばらく見つめた。

「おばあちゃんの隠し味が、自家製マヨネーズだったなんて……」

「冷めてもふわふわのままだから、お弁当に入れるだし巻き卵には、欠かせないんだそうです。悦さんが、嬉しそうに話してくれました」

おばあちゃんが、自家製のマヨネーズを作っていたなんて、今まで知らなかった。

私が知らないところで、こんなにも手間をかけてくれていたんだ。

何気なく食べていただし巻き卵が、急に特別なものに思えた。

「おばあちゃんは、本当に覚えてたんですか？」

思わず聞き返していた。

だっておばあちゃんは私のことなんて、全部忘れてるはずだ。

信じたくて、でもやっぱり信じられなくて。

心がざわついて、次の言葉がなかなか出てこない。そんな私の様子を見た日和さんは、微笑んだまま口を開いた。

「あくまで私の推測ですが、悦さんが言っていた、赤い布って、たぶん……早紀さんのお弁当を包んでいた風呂敷のことじゃないかなって」

「ふ、風呂敷……?」

日和さんは「ちよつと待っててくださいね」と言うと、カウンターの奥へ入っていく。しばらくして戻ってきた手には、一枚の赤い布が握られていた。

「もしかして、早紀さんのお弁当は、こういう赤い布に包まれてませんか?」

赤い布を見た瞬間、心の奥底に眠っていた昔の記憶がよみがえった。

毎朝、おばあちゃんが用意してくれたお弁当を包んでいたのは、赤い風呂敷だった。

思い出した途端、私は思わず立ち上がる。

「思い出した! 赤い布って、お弁当の風呂敷だ!」

大きな声になってしまう。

すると、そっぽを向いていたはずのおばあちゃんも、いつの間にか赤い布に視線を向けていた。

「そうそう。搜したのは、その布だよ」

おばあちゃんは、とびきり優しい笑顔を浮かべて、懐かしそうに目を細める。

「早紀にお弁当を作ってやらないとねえ」
そうか。やつと腑に落ちた。
おばあちゃんが、赤い布を搜していたのは、自分のためじゃなかった。搜していたのは私のためだったんだ。



私が小学生だった頃。たまにあるお弁当の日は、憂鬱だった。

クラスみんなは、人気キャラクターの巾着や、可愛いランチバッグを持ってくる。

「可愛い!」

「みんなのだって可愛いじゃん」

「それ欲しかった!」

楽しそうに見せ合うみんなを横目に、私のお弁当を包んでいたのは、一枚の赤い風呂敷。

誰にも見られなくて、お弁当の時間になると、誰よりも早くお弁当だけを机に